

上
 編
 二
 柳
 絲

^ 13
 2928
 4





仲なつんな

業わざ尔に

花はな子こぬぬ 柳やなぎ、丸まる

室むろ幸さち堂どう

江戸戯作者

為永春水誌

はななここぬぬ 柳やなぎ、丸まる
 善ぜんくく 徳とく 一いち 忠ちゆう 好こう 嬌けう 子こ 酒しゆ 家か 子こ 自じ 操そう 子こ 丸まる
 風かぜ のの 多た 柳やなぎ ぬぬ 丸まる 法はふ 存ぞん 利り をを 致ち 小せう 丸まる
 人ひと



花を先乃
ふらひの神哉
かきく
憚の羽さあを
と野ろろを
まら
方壺堂 玉枝



権子なくや
古八のおとろ
山を
方壺堂



不三晴也
網うちひやり

柳

三枝

同房 以登家内喜卷之四
新語

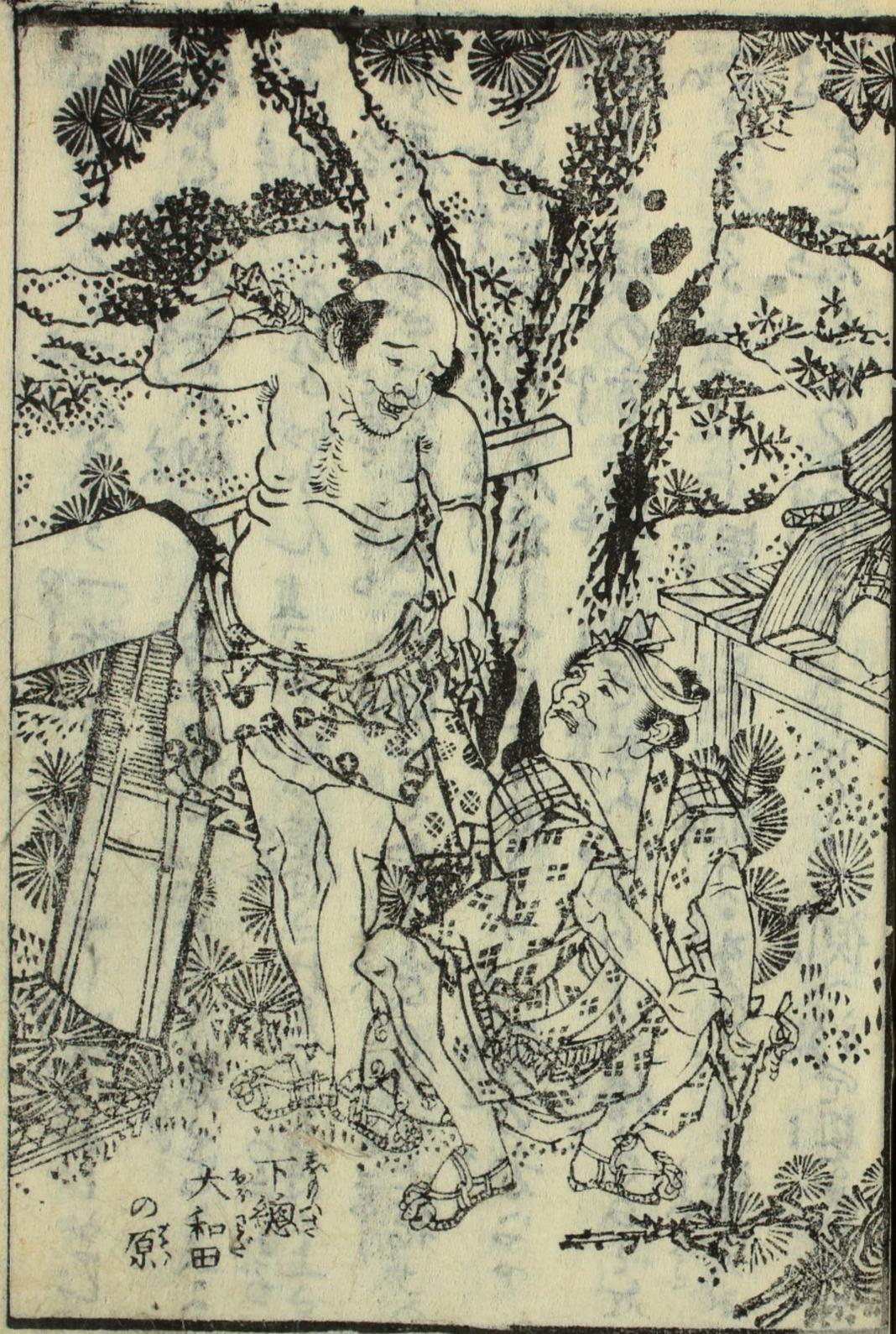
江戸 為永春水作

第七回

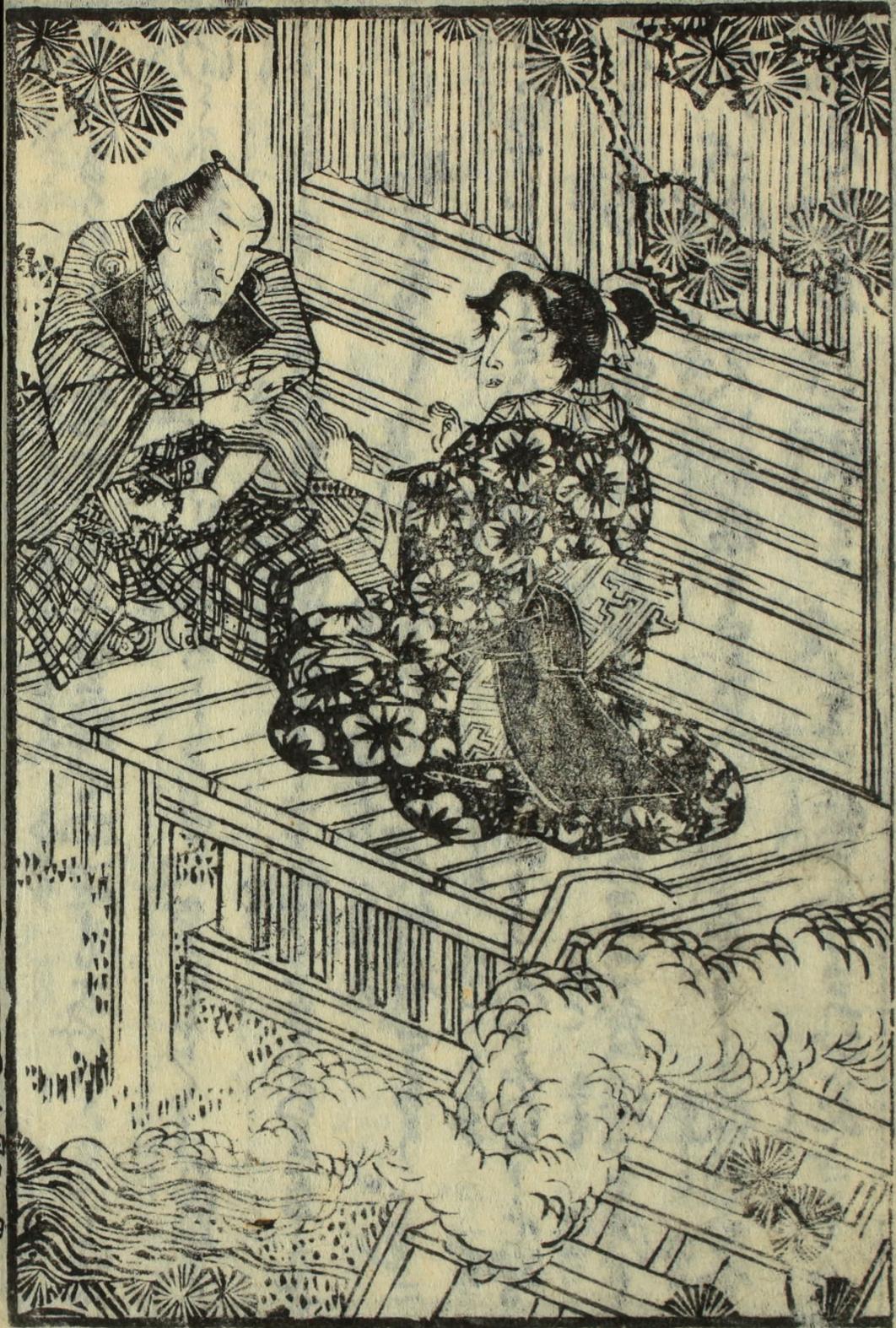
再説於千代の情人あり彼直吉といひ者へ青柳橋を渡りて
 下総の國佐倉の城下市場郡村田村とよぶ在所をさぐる
 船橋の渡より大和回原よりとて春日も説き申ける夏の日
 多喜ぶまごまご宿へおこしといひていひていひて京都よりわら
 道中めでたきを痛ら糸角ふ路の持のた珠み船橋宿の宴

押のけ三人一室の欠入言の社の中への強くはる
さう二人をい言音さく 同えーが十六七の娘二人社の
中と欠入跡つづかた大男が逃まきまきと逃たる直者
もたの結も思ひづかた天とて百の額を見合せる
その時娘と逃出さる男は本の根に寝地倒れ起りて
まる所へ大地も歩後雷の音火光十方散れと東輪の
如き父の正の天より火まきあする極の男の上の落る
ひ大雷の直者さくちの結も花もムラトのShallinへ野目何

正体さうりーら忽地兩上雲晴と田辺もあつらふさうりーら
湯の小紀直者 直り体りーらさうりーらさうりーら
思ひまきまきへ大まきる雷しよくも臍をならへるさうりーら
さうりーらサウリーら直トキミ今の入道にの着るさうりーら
左様サさうりーらの思ひづかた社さうりーらが欠出とて結
天さうりーら相よみ雷もあつらふさうりーらのラニ女侍を供へ
さうりーら今二人の相後さうりーら直イササうりーら彼節の今
倒まて居るさうりーらサウリーら雷さうりーらわたりてあつらふさうりーら



下總
大和田
の原



ト三人とて社を宣出月の朝に夫は侍見物に田の邊
果てて首の首の形をみるに夫は首の形をみる
先懸られたる是れは夫の首を懸て置きたる
原の側へ直ぐ見物に夫は侍見物に田の邊
掛るに夫は侍見物に田の邊
松の根元大雷の音もあつたに夫は侍見物に田の邊
ささげる水鉢のあを頼るに夫は侍見物に田の邊
娘の首を懸るに夫は侍見物に田の邊

ト三人とて社を宣出月の朝に夫は侍見物に田の邊
果てて首の首の形をみるに夫は首の形をみる
先懸られたる是れは夫の首を懸て置きたる
原の側へ直ぐ見物に夫は侍見物に田の邊
掛るに夫は侍見物に田の邊
松の根元大雷の音もあつたに夫は侍見物に田の邊
ささげる水鉢のあを頼るに夫は侍見物に田の邊
娘の首を懸るに夫は侍見物に田の邊

くドロく胸の所を強く押すおまんをさす一松が
口の方を一所へ押すおまんをさす一火指と次の指の間の
所を強く押す穴所のあゝ通じても娘へア痛々しく
痛のヨ一あゝしくおまんをさす直コロく娘をさす
うろく傍のヨ一言を娘へ目をひらき目をさす
直言の顔をおまんをさす一娘へハしくおまんをさす
う堪えしとら幸おまんへ押す一おまんをさす一おまんを
様のおまんをさす一直コサけ通じ二人で世話をす

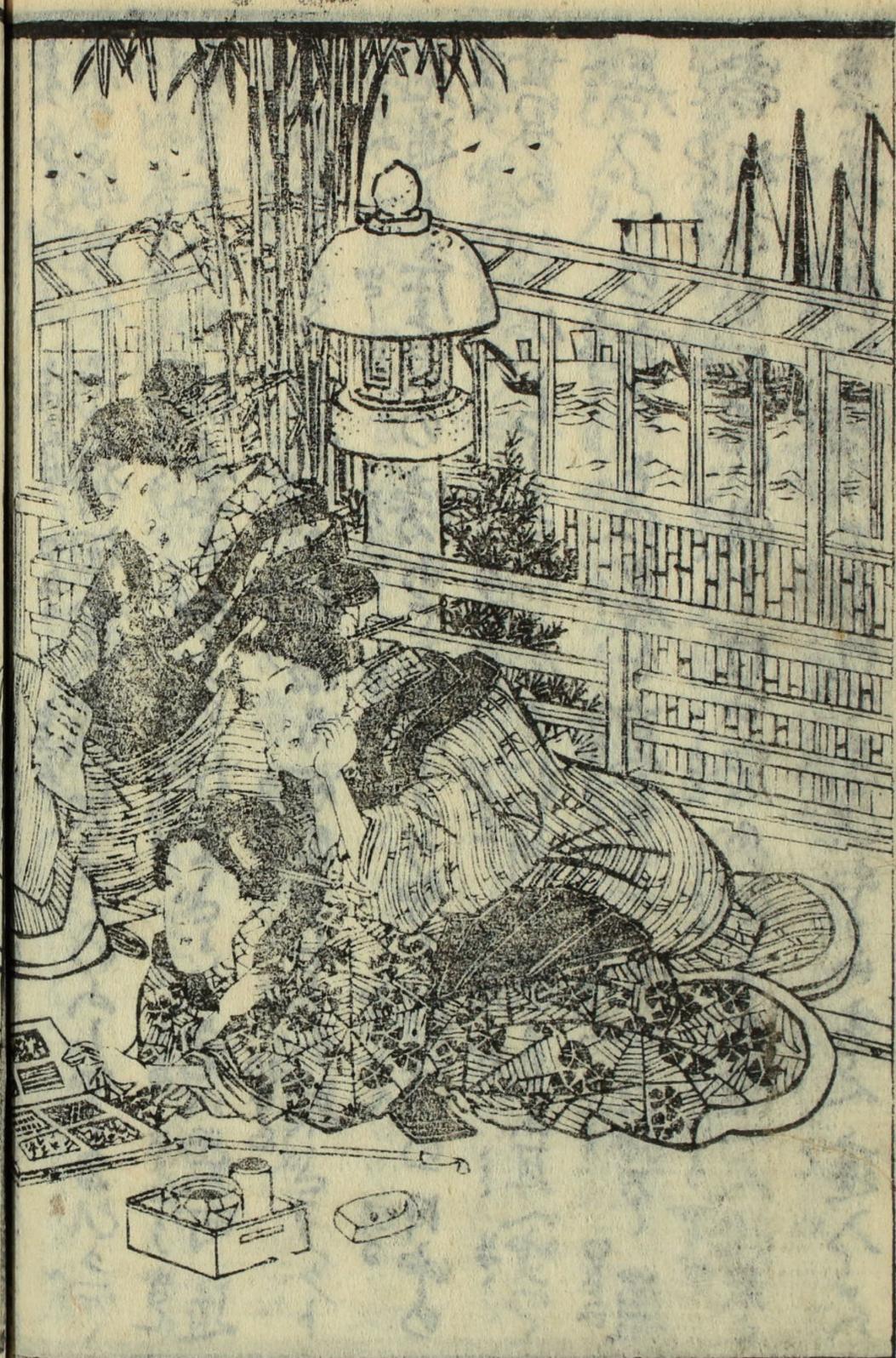
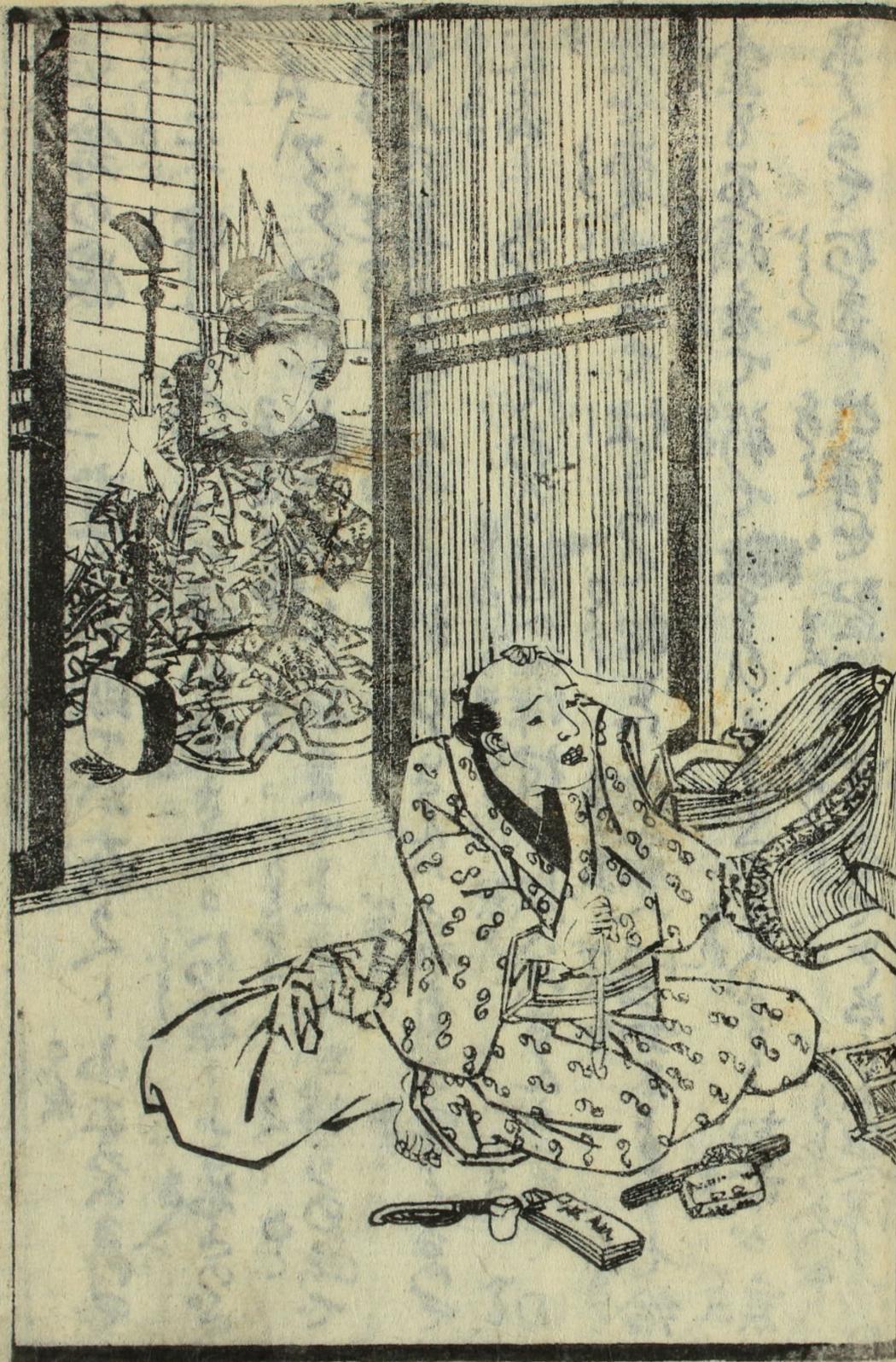
のいせも膝ひさきうろくおまんをさすお前の身のよの
おまんをさす一おまんをさす一おまんをさす一
世話をしとら幸おまんへ押す一おまんをさす一おまんを
先んで仕まろくおまんをさす一おまんをさす一おまんを
所でお後の膝の所をさすおまんをさす一おまんをさす一
おまんをさすおまんをさす一おまんをさす一おまんをさす
おまんをさすおまんをさす一おまんをさす一おまんをさす
おまんをさすおまんをさす一おまんをさす一おまんをさす
おまんをさすおまんをさす一おまんをさす一おまんをさす
おまんをさすおまんをさす一おまんをさす一おまんをさす

「イヤ、頼み入る能くも、付て直ぐも、夜火が、つる、陽也
で能く、サ、娘、い、ん、ま、の、業、物、を、あ、ま、で、下、に、が、能、く、や、ら、ま
ひ、の、直、一、然、す、く、何、も、持、ひ、し、ら、ひ、ら、ひ、ら、の、所、の、者、ら、
家、内、の、名、所、を、言、て、圖、を、の、事、ひ、か、る、花、も、の、ら、ひ、
身、の、痛、ら、の、を、堪、入、て、あ、ま、ま、あ、ま、を、ま、ま、一、体、ま、ま、
何、れ、と、は、け、は、の、中、の、居、こ、の、ま、ま、一、所、の、大、出、し、の、男、か、
何、と、く、く、く、く、く、く、何、れ、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、者、の、情、人、と、も、
あ、ま、ま、ま、ま、一、然、す、く、一、男、人、ら、し、の、男、か、の、思、ひ、の、思、ひ、の、思、ひ、の、思、ひ、

左、様、で、も、ま、い、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ト、あ、ま、ま、花、も、の、直、者、も、ま、ま、
ら、ら、ら、ら、風、信、最、新、毎、一、何、ら、ら、ら、ら、何、れ、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、
け、社、の、連、束、ら、ら、ら、一、始、末、を、子、知、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、
と、圖、で、直、者、の、花、も、の、ら、ら、一、直、一、何、れ、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、
付、ま、い、所、で、尋、ね、家、の、娘、の、命、も、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、
家、を、尋、ね、の、方、で、お、な、ら、ま、ま、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、
久、直、一、何、れ、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、
さ、ぬ、の、の、紙、を、持、て、ま、ま、一、何、れ、の、花、も、の、ら、ひ、ら、の、

中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
下も一の奥の山にありて品物第に京都の
山ノ下 二上の奥の山にありて品物第に京都の
中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
教へて世のつとめなる中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
師匠の教へて世のつとめなる中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり

用の娘はつとめなる中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
下野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
中野の梅一坊ありてサササの音もよきなり
見通し 庄屋の傍にありてサササの音もよきなり
世界の戦後にはありてサササの音もよきなり
居つたけの音もよきなり
音相方もありてサササの音もよきなり
あやまる所へありてサササの音もよきなり



金をとりて仕業と解つるものなりとてさういふことなすべし
 業もいふことなすは後へてかかた居るうらましの業も
 さるる業もさるるものヨ 業「たかしく入苦業かたも業の
 側は居るものなりとてさういふことなすべし連なりとて業も
 さるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 のりてさるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 娘のうらましの業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 さるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし

のりてさるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 さるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 娘のうらましの業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 さるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 のりてさるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 さるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 娘のうらましの業もさるるものなりとてさういふことなすべし
 さるる業もさるるものなりとてさういふことなすべし



多紙もあつては上も解でめりて なる人上方の
作まはるがわいと書てよと一てもア遠くの親類が盡み
近頃の亦用ふまのし新がはき右所のさぬが付て居て
先達てうり言ひに通り代官さぬのち役の御律上九
希さぬのち内まの上極とらふお權さす吏をさるの應
ぶのと母子さる我儘を言やうらては所の生國の骨う
おさるの奴と國庫の寐しとてさるを海ものすねまきんが

御律さぬ一國をそ見らひきき右所の言さぬのさひは
ましく知らる振投せし居るし自己のさるの長
からまひうり今日直にお權せし行ておさるさぬ
直ま返るものとさるわアらるひトあつて突退さる

以登家内喜卷之四

